生涯学習部一日研修

～たたら製鉄の歴史「菅谷たたら高殿・奥出雲」～

１０月８日（日）３９名の皆さんに参加いただき、たたら製鉄の歴史を学ぶ一日研修を開催しました。当日は、秋晴れのいい天気で「奥出雲たたらガイドの会」のお二人に終日ガイドをお願いし、ご案内いただきました。

神話の舞台でもある奥出雲は、大森林に囲まれ、山から砂鉄が取れ、大自然の恵みの宝庫であるところから、古くから「たたら製鉄」が盛んに行われ、名刀作りに欠かせない良質な鉄である「玉鋼（たまはがね）」を生産されていました。そして、近代以降の奥出雲の「たたら」では、松江藩の鉄師頭取家として田部家・櫻井家・絲原家などの鉄師が中心となった「たたら製鉄」により、地域雇用や経済に多大な貢献をしてきました。その３家とも大地主であり広大な敷地には壮麗な邸宅と日本庭園があり、そこが今は記念館、博物館になっており、高度な文化財が保存されています。ガイドのお二人には非常に詳しく丁寧に説明いただき、通常の見学だけでは知りえないことも多く、参加者の皆さんも一同に「良かった」と有意義な研修でありました。

「菅谷たたら高殿」は、全国で唯一現存する「高殿方式」で「国の重要民俗文化財」に指定されています。

1，751年松江藩の鉄師を担った田部家の一大生産拠点として建造され、操業のなかった時期を除き129年間ここでたたらの炎が燃えさかったとのこと。

天井を仰ぐと、かなり高く9メートル余あり炎が立ち上るため、屋根のてっぺんには火宇内（ほうち）が開けられていました。

建物の中央に炉が土で築かれており、両脇には何本もの送風管を付けた鞴（ふいご）（炭を燃やすための送風機）が備えてありました。たたら製鉄において、炉内の高温を保つには風が不可欠であり、

炉内に風を送るための巨大な足踏み送風装置「鞴」と呼ばれる道具があり、その作業をする人たちを「ばんこ」というそうで、その仕事はかなりきつく交代しながら作業されていたとのこと。

「ばんこ」の人たちがかわるがわる交代で作業されていたことら、「かわりばんこ」という言葉がきているとガイドさんの話でした。

また、「たたら」は湿気を嫌うため、完璧なる除湿、高温維持のための工夫を凝らし、炉の直下には、小舟と称するトンネル状の深さは5～6mの空隙部があるそうで、大規模な土木工事を施されていたとのこと。最盛期は江戸時代・文政年間（1818～1830年）で、1年間に90回操業し、生産量は約290トン。全国に流通する鉄の8割以上を産した中国山地のたたらにあって、雄たる存在だったに違いありません。周りには、事務所の役割を果たしていた元小屋があり、米蔵も残っています。かつて、たたらに従事する人々の長屋なども立ち並び、いわゆる山内（さんない）を形成されており、その形が今も残っています。

明治期に入って価格の安い洋鉄に押され、「たたら」は一時途絶えてしまいましたが、現在は「日刀保たたら」として奥出雲町で復元、操業されています。

菅谷たたら山内

菅谷たたら山内の様子

田部家土蔵群

絲原家

絲原家庭園

絶唱のロケ地（絲原家）

櫻井家の中の様子

櫻井家の庭園